

## 抑うつと感情一致効果に関する研究

吉村 晋平\* 荒木 友希子\*\* 松川 順子\*\* 鈴木 伸一\*\*\*

### Research of depression and emotion congruent effect

Shinpei Yoshimura\* Yukiko Araki\*\* Junko Matsukawa\*\* Shinichi Suzuki\*\*\*

The purpose of this study was to investigate negative bias on self-referent processing in depression, focused on the emotion congruent effects in a depressed trait and an experimentally induced depressed mood state based on integration approach. Self-relevant ratings of personality trait words were examined among a depressed trait group, non-depressed trait group and average depressed trait group. Results indicated that the emotion congruent effect was found on each group. The effect of trait on emotion and self-relevant information processing was strong.

**Keywords:** emotion-congruent effect, depression, self-relevance

### 問題

感情一致効果とは、感情と一致する刺激の認知が促進されることをいう。たとえば、ネガティブな感情のときはネガティブなことを記憶しやすく、またネガティブな事柄を自分に関連付けやすくなる。

感情一致効果について代表的なモデルは、意味ネットワークモデルとスキーマモデルである(Rusting,1998)。この感情一致効果についての研究が盛んになった背景には、うつ病患者における特徴的な記憶活動について注目されるようになったことがある。一般的にうつ病患者の記憶力は低いとされているが、それは実際に記憶が損なわれるというよりも、情報処理過程の働きによってそう見えるだけであるという知見がある。たとえば、Breslow(1981)の研究において、うつ病患者と健常者に情動的な物語を読ませて再生させたところ、うつ病患者はポジティブな部分が再生されにくかったことを見出している。

このようなうつ病患者やうつ傾向の高い人において、ネガティブな情報の記憶が促進されることや、ポジティブな情報の記憶が抑制されるという報告が多くされている。このように感情一致効果は、抑うつのメカニズムに関わっていることが示唆されるようになったのである。

感情一致効果研究は抑うつなどの感情特性との関連だけでなく、ポジティブな気分やネガティブな気分といった、ある時点での気分状態によって生じる感情一致効果についても研究されている。Bower (1981) は被験者を催眠下におき、教示によってポジティブな気分、あるいはネガティブな気分を誘導して物語を読ませ、24 時間後に自然な状態で再生させた。その結果、ポジティブな気分を誘導された被験者は、物語の中のポジティブなエ

\* 広島大学大学院教育学研究科(Graduate School of Education, Hiroshima University)

\*\* 金沢大学文学部人間学科(The Department of Literature, Kanazawa University)

\*\*\* 広島大学大学院心理臨床教育センター(Training and Research Center for Clinical Psychology, Graduate School of Education, Hiroshima University)

ピソードをよく再生した。一方、ネガティブな気分を誘導された被験者は、ネガティブなエピソードをよく再生し感情一致効果が現れた。この現象は、感情一致効果の中でも特に気分一致効果といわれている。これと同様の知見は他の研究者によっても多く得られている。

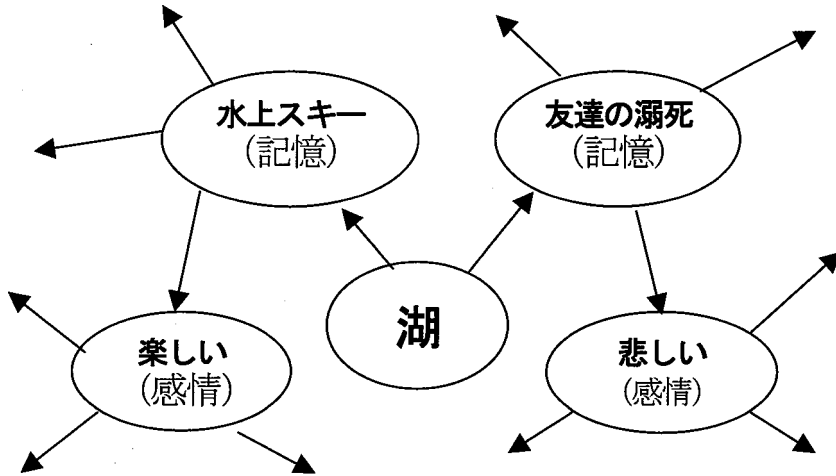


Fig.1 Bower の意味ネットワーク拡散モデル図

さらに、Bower (1981) は、感情と認知の相互作用のメカニズムを表すモデルを構築している。それは意味ネットワーク拡散モデル (Fig.1) である。このモデルは、意味記憶に関して考えられたモデルを拡張したもので、ネットワークの中に感情を表すノード (結節点) を新たに仮定し、それと結びついた記憶があるとした。ある感情を経験すると、それと結びついた情報も活性化され、処理が促進される過程が想定されている。

このモデルは、感情がどのように認知に影響するのかをある程度説明しているが、完全なモデルではない。その理由の一つは、このモデルでは説明できない現象もあるからである。その現象とは、気分一致効果の非対称性という現象である。Isen, Shalke, Clark, & Karp (1978) は、ゲームに勝ったことによるポジティブな気分の影響は、ポジティブ語の想起を促進するのに対し、ゲームに負けたことによるネガティブな気分は、必ずしもネガティブ語の想起を促進しなかったと報告している。このことは、ポジティブ気分では、気分一致効果が現れやすいのに対し、ネガティブ気分では、気分一致効果が現れにくいことを示唆している。このような非対称性は、ネガティブな気分になると、それから回復しようと、ポジティブな記憶を呼び起こそうとする動機付けや、ポジティブな記憶とネガティブな記憶の概念や構造が違うため、気分の影響がポジティブとネガティブでは一様でない等の、様々な説明があり、結論が出ていない。また、自己関連性効果という問題もある。具体的には、刺激材料を自己に関連付けて処理することが気分一致効果の生起に重要な影響を及ぼすことや、気分による認知の傾向が自己に関連する情報で顕著に見られることなどが指摘されている (Rusting, 1998; 伊藤, 2000a; 田上, 2002)。Pyszczynski (1989) はあらかじめ自分自身に関する物語を書かせることによって自己に注意を向けさせた場合にのみ、抑うつ者は不快エピソードを多く想起するが、自己に注意を向けさせない場合、不快エピソードの想起数は健常者と差がないことを明らかにしている。この自己関連性効果も、意味ネットワーク拡散モデルでは説明できない現象

である。

うつ病や抑うつ特性を有する者の認知的特徴に関するその他の研究としては、スキーマ研究がある。Beck(1967)は、抑うつ者や抑うつ傾向者のネガティブな認知は彼らが抑うつ的なセルフスキーマを持ち、それを活性化しやすいためだと考えた。このスキーマは選択的にポジティブな情報を抑制し、ネガティブな情報をよりネガティブに認知するよう促進する。このような感情特性に関連したスキーマは、セルフスキーマといわれている。また、人間の持つセルフスキーマのうち、感情と一致するスキーマが活性化されると、そのスキーマの内容と一致した情報の処理が促進される。セルフスキーマは、各個人が有する枠組みであり、自分自身に関連する情報の処理ほど、スキーマの影響を受けることは十分に考えられる。そのため、自己に注意が向けられなければ、抑うつ者であっても、ネガティブなスキーマが活性化されにくいと考えられる。このことから、スキーマモデルでは、自己関連性の現象も気分一致効果の非対称性も説明できると考えられる。

以上、スキーマモデルは、自己関連性効果や非対称性といった現象をうまく説明できるが、特性研究から構築されたモデルであるため、実験時の気分状態が考慮されていない。また、具体的な情報処理過程の精緻さに欠けており、感情と認知の相互作用のメカニズムを理解するには、完全なモデルとは言えない。

意味ネットワーク拡散モデルもスキーマモデルも、一時的な気分状態か永続的な感情特性のいずれかを考慮しているに過ぎない点で問題が指摘されている。この背景には、感情特性と気分状態を混同することなく、個別に研究するべきであるという主張がある(田上 2002)。しかし、抑うつ特性を持つ人は、抑うつ気分を感じやすく、逆に抑うつ気分を繰り返し経験する人は、抑うつ特性を形成しやすいことは十分考えられる(伊藤, 2000a)。この点で、Rusting(1998)や伊藤(2000)は、気分状態と感情特性両方を考慮した統合的アプローチによって感情一致効果研究を行う必要性を指摘している。

Rusting(1998)は、個人差アプローチ研究と気分誘導アプローチ研究が、別々に研究されてきたことによって、それぞれ異なる理論が構築されたと述べている。すなわち、意味ネットワーク拡散モデルは、気分誘導アプローチ研究から、一時的な気分状態によって感情のノードがどのように活性化されるかに焦点を当てて構築したものであるが、他方、スキーマモデルは、個人差アプローチ研究から永続的な記憶の構造に焦点を当てて構築されたものである。この区別は意図的なものではないが、その結果としてこの両者が統合されていないという理由でもある。そして、一時的な気分状態や安定した感情特性が、情報処理にそれぞれ独立の効果を持つとされた従来の伝統的なアプローチから、両者の相互作用による複合効果を検討する新たなアプローチを検討することにより、気分一致効果を最もよく予測できるとしている、Rusting(1998)は述べている。

以上のことから、感情特性と気分状態の関係を考慮に入れた統合アプローチ研究は、感情特性と気分状態と認知の関係を理解するために有効な方略であると思われる。伊藤(2000a)は、気分一致効果研究の統合的アプローチ研究を行う上での具体的な課題を挙げている。すなわち、被験者の気分状態を誘導すると同時に、あらかじめ感情特性を測定し、認知課題のパフォーマンスを記録すること、その際に認知課題で用いられる刺激材料に対する認知構造や、認知課題遂行に必要とされる処理方略を調べ、気分状態、感情特性、認知構造、処理方略を独立変数認知課題のパフォーマンスを従属変数として、各変数間の相関に基づいてモデルの適合度を確かめることなどである。

そこで、本研究では、伊藤(2000a)が挙げた実験計画を参考にし、気分状態と感情特性の両方を考慮に入れた実験を行い、抑うつ特性を基準にその時点での認知の傾向を調べた上で、気分をポジティブかネガティブに

誘導して、気分誘導後の認知の傾向を調べることにより、特性がどのように認知に影響を与えるか、特性によって誘導した気分に変化が生じるか、その結果、特性と気分は、どのように認知に影響を与えるかを検討することを目的とした。

## 方法

**被験者** 19歳から24歳までの大学生204名を対象とした。非抑うつ者と抑うつ者の分類は、BDI:Beck Depression Inventory 日本語版(林・塚本, 1987)の得点を基準に行った。記入上不備があるものを除いた200名のBDIの平均得点は、11.57点(SD=6.24)だった。平均得点-1SD以下、すなわち、5点以下の29名を非抑うつ特性群(ND群)とし、平均得点+1SD以上、すなわち、18点以上の31名を抑うつ特性群(D群)とした。そして、BDI平均得点に近い順から、平均的な抑うつ特性を持つ被験者を31名選び、平均的特性(N群)とした。さらに誘導する気分(ポジティブあるいはネガティブ)によって非抑うつ特性ポジティブ気分誘導群(NDpm群:15名)、抑うつ特性ポジティブ気分誘導群(Dpm群:18名)、非抑うつ特性ネガティブ気分誘導群(NDnm群:16名)、抑うつ特性ネガティブ気分誘導群(Dnm群:11名)、平均的特性ポジティブ気分誘導群(Npm群:15名)、平均的特性ネガティブ気分誘導群(Nnm群:16名)の6群を構成した。

### 刺激

#### (1) 気分誘導

音楽の聴取によって気分誘導を行った。音楽の聴取を用いた理由は、音楽によって喚起される感情が自然な状態に近いものであり、また言語的な気分誘導で生じる要求特性や認知プライミングの問題を抑えることができ、課題遂行中も気分誘導を継続できるからである(谷口,1991)。音楽の選曲は、伊藤(2000b)田上(2002)を参考に、ポジティブ気分誘導群は、サティ“ピカデリー”、アレインベルク“森の水車”、シュトラウス“美しく青きドナウ”を選んだ。一方、ネガティブ気分誘導群は、シベリウス“トユオネラの白鳥”“悲しきワルツ”、アルビノーニ“弦楽とオルガンのためのアダージョ”を選んだ。

音楽による気分誘導に加え、また、より気分の喚起を強めるため、課題のフィードバックを加えることにした。具体的には計算課題を行い、自己採点をして計算能力を自分でランク付けをするという課題である。ポジティブ気分誘導群は、計算課題を行う制限時間を4分とし、ネガティブ気分誘導群は2分とすることで難易度を高くした。

#### (2) 認知課題

自己関連的な情報処理を促す課題として、性格表現用語の自己関連度評定課題を行った。具体的には、40個の刺激語が「どの程度自分自身に当てはまるか」を6段階(1;まったく当てはまらない-6;非常に当てはまる)で評定させた。刺激語は、性格表現用語の学生による社会的望ましさの評定の中央値(青木, 1971)をもとに、3.5以下をポジティブ語、6.5以上をネガティブ語とし、4字から6字の形容詞・形容動詞・連体詞をポジティブ語から30語、ネガティブ語からも30語選択した。そして、気分誘導前の課題で用いる語と誘導後の課題で用いる語は別々の語を用いた。それぞれ認知課題(A)、認知課題(B)とした。

また、初願効果と親近効果を除くために、感情価が曖昧である評定中央値4.7から5.3までの10語をフィル一語として、評定リストの、はじめと終わりに5語ずつ加えた。

### (3) 気分の測定

気分誘導前と誘導後の気分状態を確認するため、寺崎・古賀・岸本（1991）の多面的感情尺度短縮版（MMS 短縮版）を用いた。MMS 短縮版は、肯定的感情に関する“活動的快”“非活動的快”“親和”，否定的感情に関する“抑うつ・不安”“倦怠”“敵意”，中性的感情に関する“集中”“驚愕”の八つの下位尺度から構成されている。各下位尺度には五つの感情を表す形容語が含まれ、現在の感情状態について4段階（1；全く感じていない～4；はっきり感じている）で評定するものである。

#### 手続き

主に講義時間を用い、冊子回答形式によって実験を行った。冊子内容はBDI、認知課題（A）、MMS 短縮版、気分誘導のための計算課題、MMS 短縮版、認知課題（B）、MMS 短縮版の順だった。気分誘導のための音楽は計算課題を始める2分前から聴取し、計算課題を行っている最中も継続して流した。

実験の目的についての教示は、最初は“数学能力と音楽の関係についての調査”であると説明をしたが、実験終了後に本当の実験目的を告げた。また、計算課題は全員が同時に始めなければならないため、計算課題より前のBDI、認知課題、MMS 短縮版については実験者が一項目ずつ読み上げてそのつど回答させるという形式をとった。計算課題の後は読み上げることはしなかった。

## 結果

### 1. 気分誘導の効果

MMS 短縮版の得点について、肯定的感情と否定的感情に関する六つの下位尺度別に、それぞれ被験者条件（NDpm 群・Dpm 群・NDnm 群・Dnm 群・Npm 群・Nnm 群）×測定時期（気分誘導前・気分誘導後）の分散分析を行った。その結果、肯定的感情の活動的快に関しては、被験者条件（ $F(5,85)=6.119, p<0.01$ ）と測定時期（ $F(1,85)=10.424, p<0.01$ ）の主効果が有意であった。ネガティブ気分誘導前では、ND 群はD 群より強かったが、ネガティブ気分誘導後では、ND 群の活動的快感情が減少し、ND 群とD 群との間の有意差がなくなった。このことから、ND 群では、弱いながらもネガティブ感情が誘導されたと考えられる。また、D 群とND 群の被験者の気分状態は明らかに異なっていたといえる。また、有意ではないものの、ポジティブ気分を誘導した条件では、肯定的感情は減少し、否定的感情の抑うつ・不安が増加した。このことから、本研究でポジティブ気分を誘導した群では、ポジティブ気分を適切に誘導することができなかったと考えられる。

### 2. 認知課題の結果

Table1 に、性格表現用語の自己関連度評定の平均値と標準偏差を示した。また、Fig.2, Fig.3 に刺激語の感情価別にグラフを示した。性格表現用語の自己関連度評定について、被験者条件×気分誘導前後の刺激語の感情価（気分誘導前ポジティブ語・気分誘導前ネガティブ語・気分誘導後ポジティブ語・気分誘導後ネガティブ語）の分散分析を行った。その結果、気分誘導前後の刺激語の感情価の主効果があった（ $F(3,83)=16.577, p<0.01$ ）。また、被験者条件と気分誘導前後の刺激語の感情価の交互作用が有意であった（ $F(5,85)=9.793, p<0.01$ ）。単純主効果検定の結果、Dpm 群以外で、気分誘導前後の刺激語の感情価の主効果が有意だった（ $p<0.05$ ）。また、全ての気分誘導前後の刺激語の感情価の組み合わせで、被験者条件の主効果が有意だった（ $p<0.05$ ）。NDpm 群、Npm 群とNnm 群で、ポジティブ語の自己関連度評定値が、気分誘導後よりも気分誘導前で高かった（ $p<0.01$ ）が、NDnm

群と Dpm 群と Dnm 群では、ポジティブ語の自己関連度評定値に気分誘導の効果はなく、抑うつ特性ではポジティブな認知に変化がないことが分かった。そして、ネガティブ語の自己関連度評定は、どの群でも気分誘導前後で差が見られなかった。

### 3. 気分誘導前後、刺激語別の群間の比較

気分誘導前は、ポジティブ語に関して NDpm 群と NDnm 群、Dpm 群と Dnm 群に有意差は無かった。また、NDpm 群と NDnm 群は、Dpm 群と Dnm 群よりも有意に高かった( $p<0.05$ )。

ネガティブ語に関して、NDnm 群は Dnm 群よりも有意に低かった( $p<0.05$ )が、気分誘導後は、ND 群のネガティブ語の自己関連度評定が高まることで、NDnm 群と Dnm 群の有意差がなくなった。N 群は、気分誘導に関わらずどの群とも有意な差が無かった。

## 考 察

本研究の目的は、感情特性と気分状態の両方を考慮に入れた、統合的アプローチにより感情一致効果を検討することであった。

### 1. 気分の変動の検討

本研究では、気分誘導の手続きの結果として、非抑うつ特性でネガティブ気分を誘導したとき、特性と気分が不一致となり、強い肯定的感情は弱くなり、弱い否定的感情が強くなると予測した。また、抑うつ特性でネガティブ気分を誘導したとき、特性と気分が一致するので、弱い肯定的感情はより弱くなり、強い否定的感情はより強くなると予測した。しかし、実際の結果、非抑うつ特性では肯定的感情が弱くなったが、抑うつ特性では変化

### 1 性格表現用語の自己関連度評定

	P 語気分誘導前	P 語気分誘導後	N 語気分誘導前	N 語気分誘導後
NDpm (AVE)	4.13	3.62	2.99	3.04
NDpm (SD)	0.6	0.72	0.46	0.59
Dpm (AVE)	3.44	3.35	3.73	3.86
Dpm (SD)	0.59	0.7	0.64	0.78
NDnm (AVE)	4.02	3.85	3.11	3.25
NDnm (SD)	0.34	0.4	0.46	0.4
Dnm (AVE)	3.16	3.07	3.96	3.84
Dnm (SD)	0.42	0.35	0.81	0.75
Npm (AVE)	3.86	3.3	3.29	3.24
Npm (SD)	0.58	0.59	0.71	0.8
Nnm (AVE)	3.75	3.34	3.4	3.56
Nnm (SD)	0.58	0.65	0.65	0.75

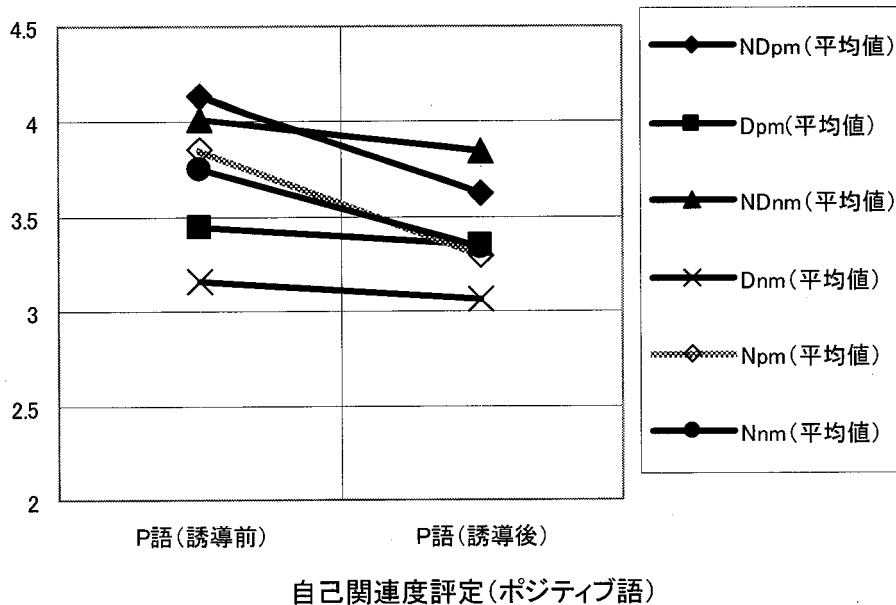


Fig. 2 気分誘導前後の性格表現用語の自己関連度評定値の変動(ポジティブ語)

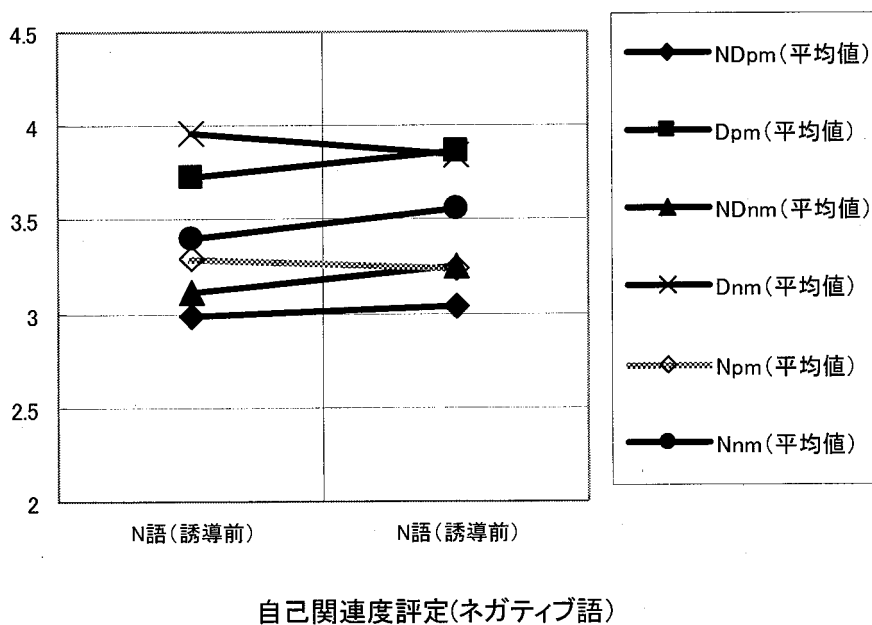


Fig. 3 気分誘導前後の性格表現用語の自己関連度評定値の変動(ネガティブ語)

がなかった。また、否定的感情については、抑うつ特性・非抑うつ特性両群ともに変化しなかった。測定時期と

被験者間の交互作用は、どの下位尺度においても見られなかったため、群間では差があるが、どの群でも気分誘導の効果が同じように認められた。この結果は、それぞれの感情特性者の感情状態が気分誘導により、一律な影響を受けたことを示唆している。しかし、ポジティブ気分の誘導方法に問題があったため、この点は明確ではない。

また、非抑うつ特性群では、ネガティブ気分誘導の効果が肯定的感情を減少させたが、抑うつ特性群では、肯定的感情も否定的感情も変化しなかった。これは気分誘導の効果が弱かったことや、ネガティブな感情になることへの抵抗が生じたためと推測される。Isen(1984)は、人間にはネガティブな気分から回復するため、ポジティブな認知をしようとする回復動機があるとしている。また、非抑うつ特性群では、ポジティブ気分をネガティブ気分よりも強く感じており、抑うつ特性群では、ネガティブ気分をポジティブ気分よりも強く感じていた。ネガティブ気分誘導後でも、非抑うつ特性群でわずかに肯定的感情が減少しただけで、非抑うつ特性群では、肯定的感情が強く、抑うつ特性は否定的感情が強いという関係は変わらなかった。

## 2. 認知課題の結果の検討

気分誘導前の感情特性に基づく自然な感情状態での自己関連度評定課題では、非抑うつ特性群の被験者は、ネガティブ語よりポジティブ語を自己に関連付ける感情一致効果が見られた。また、抑うつ特性群の被験者は、ポジティブ語よりネガティブ語を自己に関連付けるという感情一致効果が見られた。そして、気分誘導後でも、評定値の増減はほとんど無く、非抑うつ特性群で、ポジティブ語はネガティブ語より高く、抑うつ特性群では、ポジティブ語はネガティブ語より低かった。これを刺激語の感情価別に見ると、ポジティブ語ではネガティブ気分誘導前後で、非抑うつ特性群と抑うつ特性群共に差が変化がなかった。その理由は、ネガティブ気分を誘導されたことに対して、ポジティブな気分を維持するために、ポジティブな認知を変化させなかったのではないかと考えられる。しかし、非抑うつ特性ネガティブ気分誘導群の肯定的感情は、気分誘導前の方が気分誘導後よりも高かったので、ポジティブな気分を維持できておらず、ポジティブな認知をすることで、ポジティブな気分を維持しようとしたか否かは明らかでない。

前述した Smith&Petty(1995)の実験では、自尊心の高い人ほどポジティブな気分を維持しようとする傾向が報告されており、非抑うつ特性群だけ検討しても、ポジティブな気分を維持するために、ポジティブな認知をするかどうかが否かは特定できない。この点を明確にするためには、強いネガティブ気分誘導を行うか、多面的な特性の効果を調べるようにする必要があるだろう。ネガティブ語に関しては、ネガティブ気分誘導前後でどの特性でも変動が無かった。その理由とは、ネガティブな気分にならないようにする動機付けのために、ネガティブな認知をしないようにした結果だと考えられる。しかし、各特性と気分誘導前後両方の関係を見ると、ネガティブ気分誘導前では、ネガティブ語の評定は、非抑うつ特性群が抑うつ特性群より低かったのに対し、ネガティブ気分誘導後では、各特性群で気分誘導の効果は有意でないが、非抑うつ特性群のネガティブ語の自己関連度評定値が微増し、抑うつ特性群のネガティブ語に対する自己関連度評定値が微減したことで、非抑うつ特性、抑うつ特性、平均的特性の群間差が無くなっていた。このことから、抑うつ特性群の被験者は、非抑うつ特性群の被験者よりもネガティブな気分から回復しようとする動機付けが強かったと考えられる。これについても、単に抑うつ特性だからといってネガティブな認知をすると結論付けるのではなく、他の特性も認知過程に影響する可能性を探るべきだろう。

また、認知課題が、性格表現用語の自己関連度評定だったことを考えると、感情一致効果が本結果以上に現れると予想していたが、そのようにならなかった。このことから、気分を誘導して自己関連的な課題を行ったと



しても、必ずしも感情一致効果が現れるのではなく、他の要因による影響が示唆される。

### 3. まとめ

本研究でからは、以下の点が示唆された。すなわち、①気分誘導による感情の変化がほとんど見られなかったことから、感情特性は一時的な気分状態に影響を与える。②感情特性と気分状態はそれぞれ認知過程に影響し、相互作用がある。③非抑うつ特性・抑うつ特性共に、ネガティブ気分誘導にもかかわらず、認知過程にほとんど変化がなかったことから、ネガティブ気分からの回復動機が存在する可能性がある。

しかし、本研究の手続きには、気分誘導が狙い通りに誘導できなかったことを考慮すると、今後の課題としては、適切に気分誘導を行える手続きを検討すること、多面的な感情特性の測定、誘導する感情を限定すること等を考慮する必要がある。誘導する感情を限定する理由は、Niedenthal, Halberstadt & Setterlund (1997)の研究において、“happy”や“sad”気分を誘導した群が、広義のポジティブ語やネガティブ語ではなく、“happy”や“sad”に関する語で気分一致効果を示したことから、多様な感情が多様な効果を生じさせると考えられるからである。

また、自己関連度評定のみでは、対照条件が無い場合、他者関連度評定や関連付けを行わない条件などを加える必要がある。それにより、感情と認知、特に自己関連の情報処理の関係について詳細に検討することができると考えられる。

## 引用文献

- 青木孝悦 1971 性格表現用語の心理 - 辞典的研究——455 語の選択, 分類および望ましさの評定——, 心理学研究, **42**, 1-13
- Beck, A. T. 1967 Depression: Clinical, Experimental, and Theoretical Aspects. Hoeber, New York.
- Bower, G.H. 1981 Mood on Memory. *American Psychologist*, **36**, 129-148
- Breslow, R., Kocsis, J., & Belkin, B. 1981 Contribution of the depressive perspective to memory function in depression. *American Journal of Psychiatry*, **138**, 227-230
- Isen, A.M., Shaker, T.E., Clark, M., & Karp, L. 1978 Affect, accessibility of material in memory, and behavior: A cognitive loop? *Journal of Personality & Social Psychology*, **36**, 1-12.
- 伊藤美加 2000a 気分一致効果を巡る諸問題：気分状態と感情特性, 心理学評論, **43**, 368-386
- 伊藤美加 2000b 自己関連の情報処理における気分一致効果—自伝想起課題による検討—, 心理学研究, **71**, 281-288
- Niedenthal, P. M., Halberstadt, & Setterlund, M. B. 1997 Being happy and seeing “happy”: Emotional state mediates visual word recognition. *Cognition and Emotion*, **11**, 403-432
- Pyszczynski, T., Holt, K., & Greenberg, J. 1987 Depression, Self-focused attention, and expectancies for positive and negative future life events for self and others. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 994-1001
- Rusting, C.L. 1998 Personality, mood, and cognitive processing of emotional information: Three conceptual frameworks. *Psychological Bulletin*, **124**, 165-196
- Smith, S.M. & Petty, R.E. 1995 Personality moderators of mood congruency effects on cognition: The role of self-esteem

And negative mood regulation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **68**, 1092-1107

田上恭子 2002 抑うつにおける自己関連的な認知のネガティブ・バイアス—気分一致効果に着目して—, 心理学研究, **73**, 412-418

谷口高士 1991 言語機能遂行時の音楽による気分一致効果について, 心理学研究, **62**, 88-95

寺崎正治・古賀愛人・岸本陽一 1991 多面的感情状態尺度・短縮版の作成, 日本心理学会第55回大会発表論文集, **435**.